

# 水俣病論議 相様の沼の口

## 激しいビラ合戦

### 個人攻撃の文書も いがみ合う市民

水俣市

「公野の原典」といわれる水俣市で、潜在的な水俣病患者の発掘が進むにつれて、さまざまな市民運動が巻き起り、連日ビラ合戦が続いている。なかには企業責任をもちきり、患者を非難する意見も飛び出し、市民意識の分裂、離反が増大するなど、混濁的な様相さえ見せ始めた。

#### わが道行く署名団体

だが、市民同士の話し合いも進まないまま文書による討論戦はエスカレート。ついに実名入りで個人攻撃するものまで飛び出した。患者結には批判のハガキも配られた。三十七年の大争論で市を二つに分けた経験から「よそ者にませつかえさせるな」など激しい口調のものや「反体制運動だ」と感情的に決めつけるものもある。

この中で署名運動のリーダーたちは「私たちは何と言われてもいい。これまで水俣病患者を放置していたことは強く反省もしている。企業の責任を回避していると言われるが、今後の行動でわかってもらえと思う」（自民党支部長飯沼昌文氏）。「裁判を支援し

#### 応酬エスカレート

これらの市民の動きは、熊本・鹿兒島両県がさる十月六、八両日、新たに十八人を水俣病に認定、水俣病の時間的、空間的なひろがりを探めたことから表面化した。十一月一日、患者側が一人一律三千万円の補償を要求し、チソ側が中央公害審査会での解決を提案して交渉が決裂、新認定患者と家族がチソ水俣工場正門前ですわり込みを始めたところから一段と激しくなった。

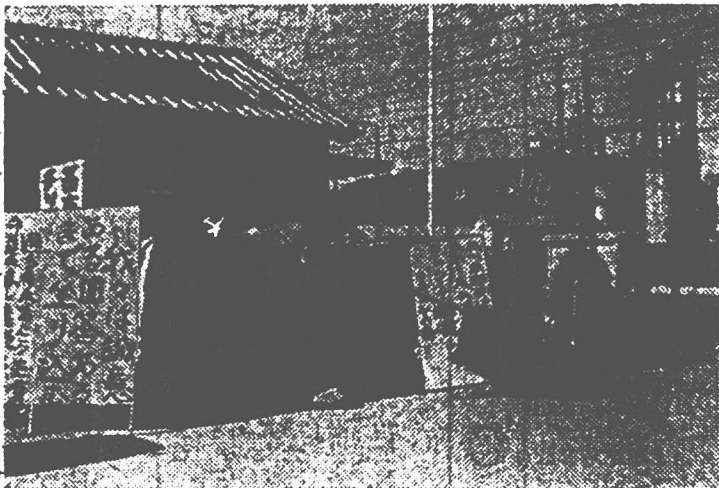
水俣市内にはほとんど毎日のように各種団体のビラが配られ、二つの団体が早期解決をうたった署名運動を始めた。署名運動は水俣市民公害対策協議会（発起人代表・池松信夫氏）と自民党など各種団体の長十六人が個人の資格で発起人となったもので、十月下旬から全市にわたって行なわれ、すでに双方で二万六千人の署名を集めているが、その趣旨はおもに行政救済（治療、施設）を国や県に訴える運動だった。

#### 発想に疑問持つ患者

患者側はこれらの署名運動から何をかぎとったか。署名者は「水俣病の解決なくして、あすの水俣の繁栄はあり得ない」と言っているが、その裏には、繁栄を第一とし、そのために水俣病問題を早期解決せよとの図式があるのではないか。繁栄のためには、やはりその中心たるべきチソがなければならぬという暗々のうちへの了解があるため、チソの企業責任については触れていない、と推量している。

新認定患者の一人は「署名運動者の発想は逆だ。自分たちが困るから患者を救えではおかしい。本当に患者のことを考えるなら患者の症状がどんなか、どんな苦しい生活を送り、何を考え、何を一番望んでいるか聞きに来してほしい」と不満をもらす。

患者側にとっては、こうした一見、中立に見える運動が、企業への加害者としての田舎をやわらげる働きをするのではないかと心配



患者家族のすわり込み(1日)

ている人たちと話し合ったが、私たちは訴訟をしている患者といわず、一任派もひつくるめて救済を訴えようとしていると言つても、理解してもらえないようだった」(公衛対策協起人代表・船松信夫氏)とわが道を行く構え。すでに公衛対策協が一万四千人、自民党などが一万二千人を越え、両者合わせて二万六千人の署名を集めたという自信からだろうか。

自民党などの要望の中には、硬直状態を納めている補償交渉の打開策として「国の行政レベルで患者のランク付けを明確にし、企業に補償しやすいようにせよ」などがある。これはチツンが検附を急いでいる中央審査会へ申請という態度と似通っているのは否めない。

「ランク付けは患者への差別だ」とする患者側には、どうして受け入れられない条件だ。

## あす二つの大会

こつしたなかで患者たちを支援する水俣病市民会議、告発する会でも「水俣病患者に対する補償を中央公衛審査委員会のよきな国家権力にまかせるのはインチキである」としており、十四日にも水

俣市に集結する。

これと同時に、二つの署名運動グループは同じ日本俣市で「水俣を明るくする市民連絡協議会」の結成市民大会を開くこととしてお

り、これが一つのヤマ場ともみられる。

しかし多くの市民は「力で押し切るようなことにならないよう」強く望んでいる。市民同士がいが

み合えば合うほど「患者の苦しみ」の原由「から離反してしまふ恐れがあるからだ。水俣市はどこへ行くと。」(西村犯者)